

本は新たな世界への扉

10/27(日)から11/9(土)まで行われる読書週間が今年もやってきました。1924(大正13)年に始まったこの読書週間は、中断期間があったものの長い歴史を持っています。この週間をきっかけに読書の楽しさに目を開かされたという人もたくさんいます。

みなさんは、読書は何のためにすると思いますか…。集中力がつくようになるし、学力もつくでしょう。でも、一番の理由は、「心が広くなるように」ではないでしょうか。

私は、朝読書の様子を時々見せてもらっています。いいですね。静かに本を開いて集中している人を何人か見かけます。少しの時間を見つけて、本に向かうのはいいことです。一流の作者が書いた本の中には、普通には体験できないような不思議で感動的な世界が広がっています。すぐにその世界に心がスーッと引き込まれ、感動体験を通して心が広がっていきます。特に、若いみなさんは柔軟で感受性豊かな心を持っています。すばらしいもの、すごいもの、美しいもの、きれいなもの、一流と言われるものにできるだけ多く触れてほしいです。

本の世界には限りない広がりがあります。人類の進歩は本と共にあり、個人の成長も読書によるところが大きいのです。読書は時間と空間を超えた体験と豊かな知識を身につけたり、他者との対話によって多様な考えを深め、自己を見つめ直したりできる素晴らしい営みです。

「灯火親しむべし」この秋の夜長、まず本を手にとってみましょう。



めざせノーベル賞

今年のノーベル化学賞に決まった旭化成名誉フェロの吉野彰さん(71)が科学に興味を持ったきっかけは、小学校の先生に薦められた本「ロウソクの科学」を読み、自然の原理に触れたことだった。興味の方向により、さまざまな進路に未来が広がる子供たち。その心に「科学の火」をともすには、どうすればよいのだろうか。

(木ノ下めぐみ)

科学への興味 幼少期に

過去のノーベル賞受賞者の子供時代

※記者会見などで語った内容による



大隅 良典さん
平成28年
医学・生理学賞

小学生の頃、大学に通っていた12歳年上の長兄が帰省のたびに宇宙や生物、化学に関する子供向けの本をくれた。吉野さんと同じ「ロウソクの科学」もあり、夢中



梶田 隆章さん
27年
物理学賞

農家に生まれ、子供時代は山や川で遊んだり、農作業を手伝ったりした。夜に輝く星々に興味を抱いて宇宙に思いをはせ、のちに素粒子「ニュートリノ」に質量があることを発見



山中 伸弥さん
24年
医学・生理学賞

父親が経営する町工場が自宅近くにあり、機械に囲まれていた。物を作ったり組み立てたりするのが大好きな子供だった。生物より物理や宇宙に興味があった

受賞者 本や体験きっかけ

も実験を重視しており、難しいテーマでも、子供が読んでもすぐに実践できる実験を提示している。

土館編集長は「子供こそ本物を見せる必要がある」と強調。同誌でも、「本物」を意識した編集を心がけており、「専門的なことを簡単にしすぎると本質を見失う。大人に分かりやすく説明をするぐらいがいい」のだという。

東北大学脳科学センターの瀧靖之教授によると、子供の知的好奇心の芽生えはおよそ2歳から。一方、科学への好奇心を刺激する適齢期については「脳には(刺激や環境に対応して変化する)可塑性があり、小学生、中学生からでも遅すぎるということはない」。

受け、何度も読み直した経験を持つ。

瀧教授が勧めるのは図鑑や図鑑に付いているDVD、科学番組などを親子で一緒に見ることだ。「子供の興味はわかれば、次は博物館や科学館などで本物を見せる。仮想と現実の世界を何度も行き来させることが重要だ」と説明する。

一方、大正13年創刊の学習雑誌「子供の科学」(誠文堂新光社)の土館建太郎編集長(41)は「科学の原点となるのは、実験の精神。自分の目で見て、やってみることで気づくものがある」と指摘する。

吉野さんも子供のころ、トイレ掃除用の塩酸にくぎを入れて水素が発生する様子を観察するなどしていたという。「子供の科学」で

「幼い頃から博物館や科学館などに通い、好き嫌いを感ずる前から日常的に訪れる場所にしてあげれば、科学への親和性が高まる」と勧

「ロウソクの科学」日本語版を出版している岩波書店によると、同書は昭和8年に発行され、累計発行部数は73万部。英国の科学者、フアラデー(1791～1867年)の講演をまとめたもので、ロウソクの燃焼だけでなく、さまざまな現象が科学的に解説される。担当者は「身近な現象を非常に分かりやすく解説し、多くの読者に読み継がれている」と語る。



子供のころから本や実験などで科学に親しみ、リチウムイオン電池の開発を成し遂げた吉野彰さん